

小林秀雄全集

第九卷



私の人生観

私の人生観	美を求める心
政治と文學	季
眞贋	見物人
壺	ソヴェトの旅
鐔	常識について

新潮社版

小林秀雄全集
第九卷

私の人生観

新潮社版

小林秀雄全集第九卷

私の人生観



昭和四十二年六月十日 發行
昭和四十八年十一月二十日 七刷

定價 千八百圓

著者 小林秀雄

發行者 佐藤亮一

印刷者 塚田重

印刷所 塚田印刷株式會社

寫眞版印刷 半七寫眞印刷工業株式會社

製本所 新宿・加藤製本所

發行所 株式會社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話東京(總機)一一一(代表)
振替東京 八〇八番

(亂丁落丁本はお取替え致します)

(第一回配本)

私の人生觀

小林秀雄全集第九卷

編輯

江 中 大
藤 村 岡
光 昇
淳 夫 平

第九卷

目次

私の人生觀

私の人生觀……………二

政治と文學……………六

美術論 I

骨董……………七

眞贋……………九

埴輪……………一〇

古鐺……………一〇

徳利と盃……………一〇

壺……………一一

鐺……………一二

高麗劍……………一三

染付皿……………一四

信樂大壺……………一六

感想 V

感想……………一四五

悲劇について……………一四八

崑ちゃん……………一五三

中庸……………一五六

「賭はなされた」を見て……………一五九

「天井棧敷の人々」を見て……………一六二

喋ることと書くこと……………一六三

自由……………一七〇

讀書週間……………一七二

ゴルフ隨筆……………一七五

栗の樹……………一八二

感想……………一八四

常識	一九五
教育	一九八
理想	二〇一
民主主義教育	二〇四
文藝春秋と私	二〇七
エヴェレスト	二一一
吉田茂	二一四
蟹まんぢゅう	二一七
美を求める心	二二一
鎌倉	二二〇
感想	二二六
國語といふ大河	二三九
寫眞	二四三
ゴルフの名人	二四九
スポーツ	二五三

もみぢ	二六一
● 人形	二六三
● 縦の木	二六五
● 天の橋立	二六七
● お月見	二六九
● 季	二七二
江利チエミの聲	二七六
● スランブ	二七セ
● 踊り	二八〇
● さくら	二八三
● 見物人	二八六
● ソヴェトの旅	二九一
花見	三〇五
DDT	三〇九
オリンピックのテレビ	三二五

常識について.....	三六
-------------	----

後記

解説.....	江藤 淳.....三三
解題.....	吉田 熙生.....三〇

私の人生観

私の人生観

この前こゝでお話しを依頼された時、「私の人生観」といふ課題を與へられました。急病で御約束を果せず、主催者の方に御迷惑をかけたが、私としては、講演などするより、勝手に獨りで病氣でもしてゐる方が餘程氣が樂だつた。今度は、不幸にして急病にもならず、どうも大變重々苦しい氣持ちで、かうしてこゝに立たされてゐるわけであります。

どうも私は講演といふものを好まない。だから、今迄に随分講演はしましたが、自分で進んでやつた事は先づありません。みんな世間の義理とか人情とかの關係で止むなくやつたものばかりです。

私が講演といふものを好まぬ理由は、非常に簡單でして、それは、講演といふものの價値をあまり信用出来ぬからです。自分の本當に言ひたい事は、講演といふ形式では現す事が出来ない、と考へてゐるからです。無論これは、私の勝手な言ひ分である。私の人生觀から割出した結論である。政治家は、演説ではたうてい己れの政見は發表出来ないなどは考へない。ヒットラアの様な演説氣違ひになりますと、雄辯術といふものが發達すれば書くといふ様な陳腐な表現形式は、將來大打撃を受けるであらうといふ様な事を「我が鬭争」の中で言つてをります。人によつて考へはいろいろであるが、まあ職業といふものが別々なものだから、それでよろしいのでせう。私は、書くのが職業だから、この職業に、自分の喜びも悲しみも託して、この職業に深入りしてをります。深入りしてみると、仕事の中に、自ら一種職業の祕密とでも言ふべきものが現れて來るのを感じて來る。あらゆる専門家の特權

であります。祕密と申しても、無論これは公開したくないといふ意味の祕密ではない、公開が不可能なのだ。人には全く通じ様もない或るものなのだ。それどころか、自分にもはつきりしたものではないかも知れぬ。ともかく、私は、自分の職業の命ずる特殊な具體的技術のなかに、そのなかだけに、私の考へ方、私の感じ方、要するに私の生きる流儀を感得してゐる。かやうな意識が職業に對する愛着であります。

天職といふ言葉がある。若し天といふ言葉を、自分の職業に對していよいよ深まつて行く意識的な愛着の極限概念と解するなら、これは正しい立派な言葉であります。今日天職といふ様な言葉がもはや陳腐に聞えるのは、今日では様々な事情から、人が自分の一切の喜びや悲しみを託して悔いぬ職業を見附ける事が大變困難になつたので、多くの人が職業のなかに人間の目的を發見する事を諦めて了つたからです。これは悲しむべき事であります。

さういふ様な次第で、私は書きたい主題は澤山持つてゐるが、進んで喋りたい事など何にもない。喋つて済ませる事は、喋つて済ますが、喋る事ではどうしても現れて來ない思想といふものがあつて、これが文章といふ言葉の特殊な組合せを要求するからであります。若し私に人生觀といふものがあるとなれば、そちらの方に現れざるを得ない。従つて、私の人生觀といふものをまともにお話しする事は、うまく行く筈がないから、皆が使つてゐる人生觀といふ言葉についてお話ししたい。

人生觀人生觀と解り切つた様に言つてゐるが、本當はどういふ意味合ひの言葉なのだらうか。人生といふ言葉も觀といふ言葉も、非常に古い言葉であるが、兩方くつついて人生觀といふのは、古い事ではありますまい。少くとも、この言葉が普通に使はれ出したのは、ごく近頃の事で、やはり西洋の近代思想が這入つて來て、人生に對する新しい見方とか、考へ方とかが起つた時から、人生觀といふ言葉も盛んに使はれる様になつたのだと思ふ。併しそれかと言つて、人生觀に相當する言葉は外國に

はない様です。或る人の説によると、オイケンの *Lebensanschauungen* が人生觀と譯されて以來、人生觀といふ言葉が廣く使はれる様になつたと言ふが、*Leben* は人生だが *Anschauung* といふ言葉は觀とは餘程違ふ様だ。觀といふ言葉には日本人獨特の語感があるからであります。

この言葉に非常な價值をおいたのは、言ふ迄もなく佛教の思想でありませう。私は佛教の専門家ではないから、常識的なお話ししか出来ぬし、折に觸れ讀み囁つた處から判斷するから、どうしても得手勝手な考へを、お話しする事になると思ふが、その點は、御勘辨願ひたい。

觀といふのは見るといふ意味であるが、そこいらのものが、電車だとか、犬ころだとか、そんなものがやたらに見えたところで仕方がない、極樂淨土が見えて來なければいけない。無量壽經といふ御經に、十六觀といふものが説かれてをります。それによりますと極樂淨土といふものは、空想するものではない。まざまざと觀えて來るものだといふ。觀るといふ事には順序があり、順序を踏んで觀る修練を積みば當然觀えて來るものだと言つてあります。先づ日想觀とか水想觀とかいふものから始める。日輪に想ひを凝らせば、太陽が沒しても心には太陽の姿が残るであらう。清冽珠の如き水を想へば、やがて極樂の寶の池の清澄な水が心に映じて來るであらう。水底にきらめく、色とりどりの砂の一粒一粒も見えて來る。池には七寶の蓮華が咲き亂れ、その數六十億、その一つ一つの葉を見れば、八萬四千の葉脈が走り、八萬四千の光を發してをる、といふ具合にやつて行つて、今度は、自分が蓮華の上に坐つてゐると想へ、蓮華合する想を作し、蓮華開く想を作せ、すると虚空に佛菩薩が遍滿する有様を觀るだらう、と言ふのです。文學的に見てもなかなか美しいお經であります、もとところのお經は、或る絶望した女性の爲に、佛が平易に説かれたものといふ事になつてゐるので、お釋迦様が菩提樹の下で悟りを開いたのはこんな方法ではなかつただらう、禪觀といふもつと哲學的な觀法によつて覺者となつたと言はれてゐるが、しかしこの觀といふ意味合ひは恐らく同じ事であらうと思は

れます。禪といふのは考へる、思惟する、といふ意味だ、禪觀といふのは思惟するところを眼で觀るといふ事になる。だから佛教でいふ觀法とは單なる認識論ではないのでありまして、人間の深い認識では、考へる事と見る事が同じにならねばならぬ、さういふ身心相應した認識に達する爲には、又身心相應した工夫を要する。さういふ工夫を觀法といふと解してよからうかと思はれます。

禪宗といふものが宋から這入つて來て擴つた後は、禪觀の觀の方を略して、禪といふ様になつたが、それ以前の日本の佛教では、寧ろ禪の方を略して觀と言つてゐた、止觀と言つてゐた様である。止といふ言葉には強い意味はないさうです。觀をする爲に、心を靜かにする、觀をする爲の心の準備なのであつて、例へば、法華經の行者が山にこもる、都にゐては心が散つて雜念を生じ易いから山に行く、平たく言へばそれが止であります。

止觀の法が傳來したのは餘程古い事です、天平時代である。唐招提寺に行かれた方は、開基鑑眞の肖像を御覽になつてゐるでせうが、あの人が支那から傳へたものださうです。あの坐像は、肖像彫刻として比類なく見事な出來で、勿論日本一でせうが、世界一かも知れぬと思はれる。瞑目端坐して微笑してゐるが、實はこの和尚様は眼が見えない。日本の學問僧の懇望によつて、日本における佛教の布教を思ひ立つたのであるが、暴風だとかその他のいろいろの障碍の爲に五回も渡航を失敗してゐる、揚州から薩摩まで來るのに十二年もかゝつてゐる。その間に日本の學問僧も死に先方の弟子も死に、和尚も船が南方に流された時病氣にかゝつて失明された。あの國寶の坐像は、さういふ坐像であります。彼が招來した摩訶止觀は、今日では、もう死語と化してゐるかも知れないが、坐像は生きてをります。あの坐像が私達に與へる感銘は、私達が止觀といふものについて、何か肝腎なものを感じてゐる證據ではあるまいか。美術品といふものは、まことに不思議な作用をするものです。

これは繪であるが、坊様の坐像で、もう一つ私の非常に好きなものがあります。これも日本一だと